



●「おののおの十余か国のかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御こころざし、ひとえに」悲喜の声を聞かんがため、交わす言葉なくとも、その人のぬくもりに出会わんがためなり。●当日は、猛烈な強風を伴った台風「六号」の関東圏通過の中、まさに天命に安んじ、人事を尽くして、遠近から一八〇余名の方々が「第九回真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会 in 東京」に参加くださいました。●「人間を忘れない」を主たるテーマとし、声なき声にまで耳をすます、そして、丁寧に自ら語り継ぐことを心に留めて、一日間という短い時間で展開いたしました。●放射線禍の不安と悲しみと怒りの声を福島の方から、未だ山積する課題の中で奔走され、心痛められている内外のハンセン病回復者の方から、そして、課題を共有する方々、支援する方々から、親鸞さんの教えから、この大切な時と場を得て、一人ひとりの胸に深く染み入っていきました。●それぞれの立場から「人間を忘れない」を表現されたその声は、裏を返せば、まさに私自身が「人間喪失」のただ中にあるということを気付かせる言葉がありました。

遠い遠い空の彼方で
消印のない封筒に封をし
心のポストに投函したら
ポストの底でコトンと音がしたよ
消印のない手紙には返事が来ない
・・・忘れない歌でした。

※挿入の詩は、交流集会一日目の沢知恵さんの「コンサートで歌われた『消印のない手紙』(作詞:桜井哲夫/作曲:中川五郎)の一部です。

ネットワークニュース「願いから動きへ」は真宗大谷派のハンセン病問題への取り組みをご紹介する広報誌です。

ハンセン病問題の今と震災・原発



◆朝方に強い台風に襲われた首都圏。しかし、台風に負けない熱い思いを抱きながら、全国各地から人々が集結して開催された東京集会一日目。◆幕開けはスタッフ手作りのオープニング映像だった。ハンセン病問題と震災・原発問題の共通課題を探るという集会テーマを、映像で表現したもの。見る者を魅了する見事な出来栄えだつた。◆その後、鎌田慧さん(ルポライター)による記念講演が行われた。「人間のいのちと犠牲をどこかにだけ押しつけるということは許されない」との発言が印象に残つた。◆リレースピーチでは、森元美代治さん(IDEAジャパン理事長)、佐々木道範さん(TEAM一本松理事長)、内藤雅義さん(ハンセン病国賠訴訟弁護団)、玉光順正さん(山陽教区)、韓国ソロクト・台湾樂生院の皆さんから、テーマに沿つたそれぞれの思いが語られた。「生まれてきたら駄目ないのちなんかあるんですか?」「私たちは加害者であり傍観者。どう福島と一緒に支えていくのか」「願いを、寝ても覚めても常に表現し続ける」など、生きた言葉が人々へ響いていった。◆夕方から行われた懇親会では、地域ごとの参加者紹介・スピーチや歌なども披露され、人との出会いが随所にちりばめられた交流の場となつた。





佐々木道範さん (TEAM 一本松理事長)

「いきいきと命いっぽい生きたい」

◆原発事故があつて放射能がふりそいで、僕たちは被曝者になりました。そんな状況の中で、どうやって子どもたちを守れるのか、ずっと考え続けています。ただ普通に生活したい、いきいきと命いっぽい生きたいんです。でも国はそこに人が生きていることを見えなくさせているし、ただ普通に生活したいだけなのに、それができないのが今の福島です。◆放射能が危険が安全か、原発が必要かどうかということが問題ではない。むしろそういう声が命を奪っているんじゃないのか。福島では子どもを産むかどうか悩む妊娠中のお母さんがいっぱいいます。でも生まれてきていけない命なんてないんです。◆福島の問題は複雑ですけれども、大切な人たちと一緒に未来に向けて歩んでいきたいと思っています。中途半端に死にたくありません。放射能が残っていることだけが僕の中では許せないけれども、人間らしく、いろいろな人たちと、一人の人間として出会っていきたいなと思います。



森元 美代治さん (IDEAジャパン理事長)

「ハンセン病を生き抜く」

◆最近の多磨全生園では「最後の五〇人になりたくない」という声を聽きます。本当に安心して最後を迎えるような環境を整えていかなければなりません。◆そして二十世紀に犯した大きな過ちを忘れないためにも、ハンセン病関連の施設を世界遺産にしていくことをこれから目標にして頑張っていきたいと思います。ハンセン病問題の運動には終わりはありません。



内藤 雅義さん(ハンセン病国賠訴訟弁護団)
「ハンセン病と原発 科学と責任」

◆ハンセン病と放射線被曝の類似性は、わけのわからないものへの不安と恐怖があることだと思います。放射能の低線量被曝の程度の影響については実際のところよくわからないというのが現状です。◆ですから逆に放射能の影響を恐れて県外に避難させることにより家族を分断させてしまったり、故郷から離れなければならぬことで、むしろより大きなリスクや被害が出るかもしれないということも私たちは絶えずしっかりと考えていかなければならぬ。◆科学の点から言えば、わからぬことに関してはきちんと事実やデータに基づいて、科学者同士が議論しなければなりません。その上で責任をとるべきところはきちんと責任をとらせていくことが必要だと思います。◆私たちはこの福島の原発事故の加害者であり、傍観者でありました。そのことをしっかりと自覚した上で、私たち一人ひとりがその責任を分担し、みんなでどう福島を支えていくのか、考えていかなければなりません。

金明鎬さん(韓国国立ソロクト病院)



◆現在ソロクトでは五五〇人が一緒に生活しておりますが、平成二三年の八月までは患者以外は一緒に生活することができます。なぜ家族が一緒に生活することができないのか、私は自治会長として韓国政府や与党や野党などに嘆願書を提出してきました。一緒に暮らせなかつたのかとも悔しかつたからです。◆やつとの思いで家族は一緒に暮らしてもいいという許可がおりましたが、政府からの援助はありません。ですからボランティアなど多くの皆様からの援助はとてもありがたいです。◆ソロクトに関心をいただき、またこのような集会に私たちをご招待いただき、ありがとうございました。





林
りん
素鳳さん
そほくさん
月銀さん
げつきん
(台湾樂生院)

♦ 樂生院では、地下鉄工事により、永年住み慣れた場を追い出されて、この一〇年行政との交渉を余儀なくされました。その間に三〇〇人以上いた入所者が一七〇人あまりになりました。その中では悲惨な状況の中で自ら命を絶つ人や、環境の変化で体調を壊してしまう人などもいました。♦ また生活に関しても入所者の高齢化が進んでいますが、行政は充分なケアをしてくれていないのが現状です。♦ 現在世界各地にあるハンセン病療養所を世界文化遺産に登録して後世に残そうという運動がはじまっていますが、私たちも日本の皆様と手を携えながら、樂生院もまた文化遺産に登録し、忘れられていかない努力を続けていきたいと思います。



玉光順正さん(山陽教区)
「浄土と国家」

♦ 今の時代を生きていくとする時には、きちんと異議を申し述べ、対峙する姿勢をもつことが念仏であり、人間として「人間を忘れない」ということ」もあります。♦ 「亡くなられた柴田良平さんが、「願いとは思想、動きとは実践」ということをおっしゃっていました。自分のもつ願い、思想を実践として行動するということがこの交流集会のもとにあるわけです。実践としての浄土、浄土からのはたらきを受けて生きているとはどういうことなのか、考えて行動することになります。♦ 『仏説無量寿經』の四十八願の最初の願いに「わたしが作る浄土には地獄、餓鬼、畜生がない」ということが言われています。「地獄」は戦争、暴力。「餓鬼」は文化的な貧しさ、知的な貧しさ、物的な貧しさ。そして「畜生」は差別、抑圧、隔離、排除。それらからの解放ということが浄土から願われていると。♦ 念仏は単に宗派として念仏をするのではありません。親鸞聖人は宗派を開いたのではなくて、仏教を開いたのだと。仏教を開いたということは仏教を解放したということです。あらゆる宗教、思想に対して仏教が解放された形で親鸞聖人は「真宗」という名のりをあげたのだと私は考えています。

「ハンセン懇」有志の会からの報告

「ハンセン懇」有志の会は、「台湾樂生院・韓国小鹿島ハンセン病補償金不支給処分取消訴訟」裁判の支援と「台湾樂生院」と「韓国小鹿島」の回復者との招聘、交流のために「ハンセン懇」のメンバーをはじめ、宗参議員や多くの支援者の寄付により、全国交流集会への招聘旅費や滞在費、療養所への交通費などに使用してきました。今回の交流集会には、両療養所から7名の参加があり、交流懇親会や終了後のスカイツリーツアー等の費用として182,855円を使用しましたので報告いたします。この後、両療養所にお札を兼ねて2014年6月中旬には台湾樂生院の訪問を予定しています。是非ご参加ください。

耳をすます そして 語り継ぐ



◆ 交流集会一日目は国立療養所多磨全生園において「耳をすます、そして、語りつぐ」をサブテーマとして開催されました。前日の台風二六号も過ぎ去り、静かな空が顔を出しました。午前中に公会堂で「物故者追悼法要」が禿信敬東京教務所長の導師のもと勤められました。ご本尊を堂内、舞台上に莊厳し「阿弥陀経」「正信偈」御念仏が園

内に響流しました。法要後、二階堂行壽東京集会準備委員会委員より法話がありました。◆その後、A地区(国立ハンセン病資料館内・雑居房・重監房・望郷の丘)に分かれ担当の東京スタッフ

◆ 最後は砂川昇さん(東京集会準備委員会副委員長)の閉会挨拶、奥林曉解放運動推進本部長より読み上げられ、満場一致で採択されました。





一階堂 行壽さん（東京集会準備委員会委員）

「「うめきを大切にし歩んでいきたい」

◆私が最初に療養所の方からいたいたい言葉が「歩くして私たちはこのような場所に居続けなければならぬのですか」というものでした。◆その時は、そのことに応えることはできませんでしたし、ある意味では今でもそれには応えるということはできなかかもしれません。しかしそこで悲痛な人間のうめきを感じました。◆サンスクリット語で慈悲の「悲」は「カルナ」）と言うそうです。これはうめきと



柴田すじ子さん（東日本退所者の会・あおばの会）

「温かいところを寄せてほしく」

◆ハンセン病問題は家族の問題というのが、未解決のまま残っていくんじやないかなと私は思っています。あおばの会を一ヶ月に一回ほどのペースで行っているんですけども、家族の縁に薄い私たちにしてみれば、老後のことはやはり一つの課題ですね。◆やはり周りの人に支えられて、そして皆さんと広く交流していくことによって、どこに生活しても生きていけるんじゃないかな、ここに豊かにいられるんじゃないかな、私はそんなふうに思っています。そんなことでこれからもずっととずっと、温かいところを寄せてほしいと感じます。



鈴木慶太さん（学生NGOチャオ代表）

「生の声を聞ける最後の世代として」

◆今、当事者の方々の高齢化が進行していくなかで、私たちはチャオをやっていますけれど、私たちは本当に、当事者の方の生の声を聞ける最後の世代かなと思っています。◆これからも若い世代が、若い世代にそのハンセン病の歴史と、回復者の方々の思いをうつむきを大切にし、見つめ合いながら歩んでいくけれど、それが、南無阿弥陀仏の呼びかけではなかろうかと思います。



Fさん(多磨全生園・真宗報恩会)

今は月までロケットに乗れば簡単に行ける時代に、どうして私たちは、ふるさとに行くことがかなわないのだろう。



佐藤裕子さん(原発事故避難者)

ハンセン病療養所での保養ツアーがあるので行ってみないかというお話をお伺いして、子どもは行きたくないとは言つたんですけども、何か得るものがあるんじゃないかなと思って、無理やり連れて行つたんです。♦でも今思うと、それが正解だったなと思います。なぜかと言うと、その長女はこのツアーに参加をして、いろいろな方とお話ををして、「私もこういった役に立つ仕事がしたい」と言ってくれました。私にとつても娘にとつても大事な一步で、それを学ぶことができたのが光明園だつたかなと思います。♦今度光明園に行くときには、原発避難者の佐藤裕子ではなくて、そして回復者の誰々ではなくて、福島から遊びに来た佐藤さん、岡山のお父さん、お母さんといった関係で、皆さんにとって考えていいたい。

※花さき保育園は多磨全生園敷地内にあります。

神美知宏さん(全国ハンセン病療養所入所者協議会会長)

♦人間八〇才を過ぎますと、どうしてもふるさとのことを思わずにはおれなくなります。死ぬ前に一度でいいから、若いころに暮らしたふるさとがどのように変わっているか見てみたい。死ぬ前に一度でもいいから、先祖の墓参りをして自分が死にたいということが、日常的に療養所のなかではお互に話し合われております。♦今私が感じておりますのは、六二年間、市民の皆さん方のご支援を得て自分たちは闘つてきましたけれども、もう限界に来たというのが私の実感であります。東京に代表を集めましても、付き添いつきでなければ東京に出てこられなくなつてきています。♦しかし、このまま黙つて死ぬわけにはいかない、生きしていくよかつたという状況を実現して、われわれの運動を閉じようではないかと、みんな考えているんです。♦私たちの運動はあと一両年続くかどうかというのが、私の実感であります。文字通り危機意識を持つて毎日を生き続けているんです。♦そこで皆さん方にお願いを申し上げたいのは、国が責任を取ろうとしないという厳しい





参加者のアンケートより



■人間の命の重みはどの地域に住んでも、どんな立場でも同じである。特定の人だけが優位な人生を送るとかそんな国になつてほしくない。偏見や差別の心をもたない子供に育てていこう。そう思う。もっと沢山の方に、この会に参加してほしい。（福島県女性）
■お一人お一人の言葉が重いです。貴重ないのちの言葉なのだと感じとれました。そのこと 자체が恵みだと感じました。この出会いと問い合わせを、あたためて運んでいきたいと思います。理解できない言葉程大



切にしていくことの意味を知りました。（首都圏市民の会）
「ハンセン病」という言葉は聞いたことがあっても、どういうものか今まで詳しくは分からなかつたのですが、今回初めて参加させていただき、心に響くことが多々ありました。また、リースピーチ等で福島に住む佐々木さんや佐藤さんの話を聞いて、「人間らしく生きる」ということについて改めて考えさせられました。（大谷派関係者）
オープニングムービーから、涙をこらえることがで



きませんでした。昨年、今年と夏休みに保養でお世話になつたご縁でハンセン病について学ぶことができ、今まで知らずに生きてきたことを深く反省致しました。回復者の方々は、福島の私たちの言葉に耳を傾け、優しく寄り添つてくださいます。保養を通して、出会いうことができ、みんなから学ぶことがたくさんあります。私の生きるお手本です。（福島県女性）

私は「人間をわすれない」という呼びかけを聞き、あらためて、家族、地域の方々、などとの関係を見直



■ 足元から見つめて、東北の方々などの出会いを大切に、人間を忘れない歩みをします。(大谷派関係者)

■ 心が痛むことを大切にしたい。(学生)

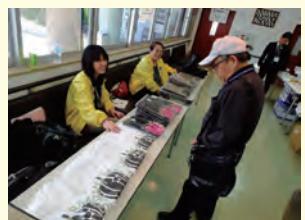
■ 「痛み」を理解するといふことは難しいことかもしれないが、今後もこうして機会に出席して、少しずつでも差別に対する痛みを、自分自身のこととして受けとめてゆきたい。(大谷派関係者)

■ 国は時として人を忘れるが、その人に関った人は忘れない。生まれてくる命に



■「我々は、うめきを感じる時がある。が、にもかかわらず、そのうめきを忘れて、そのうめきの世界を見ようとした」近代・現代の世相に決して惑わされない、視点をもち続けていかねばならない、ということを教えていただいた機縁でした。（大谷派関係者）

生まれてはいけないなんてことはない。私たちには加害者であり傍観者である。どう福島をさせえるのか私たちの課題でもある。（福島女性）



記念講演

「ハンセン病問題の今と震災・原発」

鎌田 慧 さん
かまた さとし

私がハンセン病市民学会の共同代表という

大役を引き受けましたのは、自分がハンセン病について何もしていなかつた、という強い反省からでした。何もしていなかつたというのは、無関心だったということです。もちろんハンセン病のことは本を読んで知っていますが、それはたんに知つてじるというだけで、なんの関わりも持たずに過ごしていました。

多磨全生園には敷地を囲むように終の垣根がありますが、他のハンセン病療養所にも同じように、周囲に垣根とか塀とか、海とか川があります。その裏にはハンセン病にかかつた人たちを隔離された敷地の中に全部放り込み、どんどん放り込んで、自分たちが住む場所は安心して暮らせる世界にってきたという歴史が流れているのです。それを知ったときのショックは言ひようがありません。自分たちは高枕で安心して寝ていたのです。

そのことには私たちにも関係していく、全国的に「無らい県運動」という、「「ら」のない地域へ」というかたちで、自分たちの地域から療養所にどんどん放り込んでいった共犯者だったのです。「無関心」というのは共犯なんだと、いうことに気づいて、愕然としました。原発の問題においても、少数の人たちが、いまだどこかに移住して苦しんでも、大多数はほ

とんど感じない、感じない振りをしていました。

今、福島はそういう状況になつてします。どうせ汚染したんだから、そこにどんどん、また汚染施設を持っていけばいいということになつてます。人間にとつて大事なのはもちろんのちですが、「このちとふるむこと」という、これは密接な関係があつて、このちの生きているところは、やっぱりふるむことなんです。

ふるむことをなくされて、いのちもなくされる。放射能で汚染されて住めなくなるようにして、そこで病気になって亡くなつていくという二重の加害者に、原発はなつてます。その地域の内側の矛盾がどんどん深まつてます。

犠牲をどこかにだけ押し付けて生きていく。ハンセン病もそうですし、原発もそうですし、そういうことは許さるものではありません。みんな同じ運命を共有して一緒に生きていく。寛容とか、譲り合ひとか、受け入れるとか、そういうことを今の政権は、もともと考えてません。原発を輸出して儲けようとか、産業が発展すれば人間のいのちはどうでもよいのか、そういう人間性に悖るようなことが許される社会でよいのか?という問いかけが、これからますます一人ひとりに問われてくると思います。



ルポライター
ハンセン病市民学会共同代表
さようなら原発「〇〇〇万人アクション」呼びかけ人



「人間を忘れない東京宣言」が採択されました。

秋晴れの東京の地にて、東京宣言が声高らかに宣言されました。この宣言は、今後私たちが活動指針とすべき3つのことを誓ったものです。この宣言の内容をかみしめながら、一人ひとりの主体的かつ具体的な行動によって、宣言に魂を吹き込んでいきたいものです。「汝、起ちて更に衣服を整うべし」(仏説無量寿經)。自らの姿勢を整えながら、起ちあがり、歩き出すべき時が訪れました。

「人間を忘れない東京宣言」

私たちは、第9回真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会において下記の宣言を採択し、今後の歩みの指針とすべく、ここに内外に向かって表明します。

ハンセン病隔離政策で故郷^{ふるさと}を奪われた人々と、原発事故で故郷を失った人々には、共通点があります。それは、国の隔離政策や原子力行政によって、様々な苦難を強いられているということです。さらにそこには、私たちの持つ忘却や風化が重なりつつあります。この国や私たちが常にいだく闇、それは、そこに生きている人間を忘れてしまうという闇です。

私たちが大切にしたいことは、人々のいのりの声に耳をすますということです。今を懸命に生きる人の声に、そして、亡き人たちからの声にも、私たちは耳をすますのです。そして、自らが出会ってきた人や言葉をきちんと受けとめ、それを自らの課題にまで深め、次世代へ伝える担い手になるのです。

人間を忘れない。それは、目の前の人を、道を求めて今を生きる**同朋**^{どうほう}として見いだしていくということです。親^{しんらん}鸞^{しよう}聖^{しゆ}人^{じん}は、**憶念**^{おくねん}という言葉を大切にされました。憶念とは、ずっとそのことを思い続けていくということです。人間を簡単に忘れ去っていく時代社会に身を置きつつ、ひとりの人間をずっと見つめ続けていく世界への歩みをすすめていきたいのです。

私たちは、ここに次のことを誓い、集会宣言といたします。

- 1、ハンセン病問題や震災・原発問題など、個別に見える諸問題の底には、人間回復・人間解放という普遍的な課題が流れているということを、しっかりと知り続けていく学びをすすめています。
- 2、「最後のひとりまで」で終わってしまう運動ではなく、たとえ最後のひとりがいなくなつたとしても、ハンセン病問題や震災・原発問題を自らの大切な課題として受けとめ、次世代に語り継いでいきます。
- 3、ハンセン病問題や震災・原発問題などへの取り組みを、**真宗同朋会運動**^{しんしゅううどうほうかいうんどう}としてとらえ、そこに生きるひとりの人間を、同朋=すなわち道を求めて今を生きる者として見いだしていく運動を、一人ひとりの責任においてすすめています。

2013年10月17日

第9回真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会 参加者一同

2016年、春、第10回山陽集会開催!!

人間回復の願いを、もう一度世界に発信していきたい

山陽集会に向けて

中杉 隆法（山陽教区ハンセン懇委員）

■第九回真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会におきまして、次回の交流集会を山陽教区で開催することを宣言させていただきました。■開催時期は二〇一六年春を予定しております。山陽教区には長島愛生園、邑久光明園という二つの療養所があります。これまで教区として、また教区を飛び越えて様々な人たちが両園の方々と交流を重ねてきました。その中で聞いてきた言葉、感じてきた思い、発せられた願い、をより広く深く全国の皆様と共有したいと思います。次回は第一〇回という節目の集会となります。■回を重ねることに様々な課題に向き合い、様々な出会いを生み出してきた交流集会、その中で私は、ハンセン病問題から問われた人間を回復するという普遍的な課題をハンセン病問題に留まらず、様々な問題にきちんと当てはめ丁寧に考えていくなさいと教えられました。ハンセン病問題は決して終わつていません、そして決して終わらせてはいけないものだと思っています。それを証していくものとして、ハンセン病問題そのものから生み出された人間回復の願いをもう一度世界に発信していけるような集会にしたいと思います。■東京集会からは二年半という期間があります。少し長い気もしますが、じつくりと山陽集会にむけて準備をすすめていきたいと思つております。これからの一ヶ月半、山陽集会にともに参加するべく歩みをいまここから始めていきましょう。二〇一六年春の日に山陽教区でお待ちしております。

交流集会を終えて

●台風二六号までもが参加した東京集会でした。交通機関の乱れの中、大変な思いをして全国からお集まりいただきありがとうございました。暴風の中を駆けつけてくださった発言者の方々、体調のすぐれないなかお手紙を託してくださいましたFさん、塔さんの詩をエネルギーに歌い上げた沢さん、台湾、ソロクトから揃つて来日された回復者の方々、ここには書ききれないすべての参加者の方にお礼を申し上げます。●この集会はひとりひとりの願いが集結して燃り上げられたものだと感謝しております。長年聞くことをおろそかにしてきた私の耳には、発言者のことばが『魂の叫び』となり深く残りました。『人間であることとを憶念し続ける』このことを深く心に刻んでまいりたいと思います。●二年前から準備を進めてくださった東京チームの皆さん、お疲れさまでした。中でも砂川さんの懇親会の盛り上げと感動的な閉会宣言は素晴らしいものでした。●次回は、二〇一六年春に山陽教区での開催が決まり、次なるあゆみも始まつております。元気なお姿で皆様と再会できますよう願っております。

（交流集会部会 藤井満紀）

真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会 ネットワークニュース



真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会
ネットワークニュース『願いから動きへ』37号
発行日 2014年1月1日
発行人 奥林 晃
発行 真宗大谷派解放運動推進本部
〒600-8505
京都市下京区烏丸通七条上る
真宗大谷派宗務所
TEL 075・371・9247
FAX 075・371・9224
E-mail kaiho@higashihonganji.or.jp